

氏名(本籍)	齋藤環 (岩手県)
学位の種類	医学博士
学位記番号	博甲第783号
学位授与年月日	平成2年3月23日
学位授与の要件	学位規則第5条第1項該当
審査研究科	医学研究科
学位論文題目	思春期・青年期に発症し遷延化した無気力状態に関する研究 (Dissertation形式)
主査	筑波大学教授 医学博士 小泉準三
副査	筑波大学教授 医学博士 岩崎寛和
副査	筑波大学教授 医学博士 大貫稔
副査	筑波大学教授 医学博士 松下松雄
副査	筑波大学助教授 医学博士 久保武士

論文の要旨

<目的>

思春期・青年期に発症し長期に遷延化した無気力・ひきこもり状態の事例が近年増加している。この種の精神状態像は、現在の精神障害分類にはそのいづれにも属さないもので、精神医学領域での一つの重要な検討課題となっている。このことについては Walters (1961) が最初に報告し、我が国では笠原 (1971) がいわゆる student apathy として報告している。現在こうした事例が増加傾向にあり、教育的、精神衛生的そして社会的に深刻な事態を呈しつつある。しかし、これまでにこの病態について精神医学的な診断上の位置づけや治療などに関する研究は十分になされていない。本研究はこの状態を呈した多数の事例の分析と検討を通じて、その特徴を明らかにするとともに、この状態の類型分類をも試みた。また症状の改善に関する要因についても分析を加え、この種の事例の治療についても検討し考察を行った。

<対象>

対象者は、1983年1月から1988年12月までの6年間に筑波大学附属病院と著者がかかわる治療機関を受診した思春期・青年期の事例のうち、精神分裂病、躁うつ病、その他の精神障害などのいづれにも属さないもので3ヶ月以上の長期にわたって無気力・ひきこもり状態を呈した80例(男性66例、女性14例)である。

<方法>

対象者の病歴、無気力・ひきこもり状態およびその随伴症状、治療内容などを評価した。評価には従来から用いられている評価表を参考にして著者が作成したものをを用いた。この結果をもとに無気力・ひきこもり状態の類型分類を試みた。また、症状改善に有効な要因を明らかにするために改善群と非改善群の比較検討を行った。

<結果>

1. 対象者は①精神的随伴症状が重篤な重症型アパシー中核群、②随伴症状が軽度な軽症型アパシー中核群、③人格障害が目立つ重症型アパシー辺縁群、④軽症型アパシー辺縁群⑤境界線人格障害と類似の症状を有する境界線型アパシー辺縁群の5類型に分類することが出来た。

2. 不登校を初発症状として発症する事例が多く、このことは学生の教育、厚生補導の面でその対策に重要な課題であることが判った。

3. 症状の改善を妨げる要因としては発症年齢が低いこと、対人恐怖や強迫症状が目立つことが認められ、改善に有効であったものには家族の治療の協力や本人の治療意欲があることなどであった。

<考察>

無気力・ひきこもり状態の事例を診断する上で最も鑑別を要する精神障害として精神分裂病がある。対象群からは慎重に除外したものの、分裂病との鑑別が困難であった事例も一部に含まれていた。しかし笠原が指摘するように、分裂病との鑑別は一般的には容易であり、面接時の疎通性の良さ、陽性症状が顕著でないこと、経過中に人格水準の低下を来さないことなどから対象群はあきらかに分裂病とは異質な群と考えられた。この状態全体に共通する精神症候学的な特徴としては、過敏で強迫的な性格傾向の上に、なんらかの挫折体験を契機に生じた反応と考えられた。また初発症状として不登校が多いことから学生の教育現場でその対応の重要性が示唆された。

この種の事例と、アメリカ精神医学協会による精神障害分類(DSM-Ⅲ-R)などの診断カテゴリーとの鑑別点について考察した。この無気力・ひきこもり状態はこの中核的症状を中心として、現在の精神障害分類における精神分裂病、神経症などいわゆる機能性精神障害と人格障害などにおける各種の精神症状を伴った一種の症候群であるということが可能である。境界線人格障害については、重症型アパシー中核群に近縁なものとして位置づけられ、その関連性が示唆された。

症状改善の要因としては家族の治療協力および本人の治療意欲などがあげられ、こうした事例ではまず第1に本人に対する周囲の理解と治療的対応が重要であることが示唆された。

こうした事例に対する新しい治療的試みとして、短期宿泊療法、若者クラブなどがあり、こうした治療による改善の経過をそれぞれの事例に基づいて検討し、良好な成績を得た。

審 査 の 要 旨

現在、精神医学とくに学校精神衛生領域で学生の教育現場でその指導上問題となっている無気力・ひきこもり状態について多数の事例の病態と治療などについて取組んだ研究である。この状態像の精神障害分類上の位置づけが十分になされていない今日、その精神症状を一つの症状群としてまとめ、更に類型化を行い、治療困難な事例にその症状の改善策を追求したことは評価できる。一般に病因不明の精神障害は多く、それらの治療に困難を極めているのが現状である。本研究を出発点として今後も更に継続してその病因解明と治療法の開発に寄与することを期待するものである。

よって、著者は医学博士の学位を受けるに十分な資格があるものとみとめる。